
彼のにおいにつつまれて。

ろしあぱん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼のにおいにつつまれて。

【Nコード】

N5495B

【作者名】

ろしあぱん

【あらすじ】

『私の精神安定剤』に書き足しました。大学生の「私」と、その彼氏恭平の日常のひとこまのお話です。

私はソファーに寝転びながら、じつと睨んでる。キッチンのテーブルにどっかりと乗っかって、こちらを向いているV A I Oの文字を。

その向こう側には普段はかけない薄い眼鏡をかけている、恭平の姿がある。寝転んだ状態だと顔は見えないけれど、彼は真剣な表情でパソコンの画面とにらめっこしているはずよ。私が起き上がれば、その真剣な表情を観察できる。

でも、見ない。

だって悔しいじゃない。あの切れ長の目が、真剣な光を宿しているのを見ると、どきどきしてきちゃうんだもの。私を見てるわけじゃないのに。パソコンに嫉妬するなんて、馬鹿馬鹿しい。

だから、見ない。

聞こえてくる音は、カタカタと文字を打つ音とパソコンの起動音。そして、換気扇が回る音。

恭平も私も、大学生。

恭平が今、必死になっているのは明日提出のレポート。私は取っていない科目だから、みてもわからないし、ましてや教えることなんて、出来ない。

いつもなら、必殺技『コピーアンドペースト』を使っているところだけれど、今回はそれが出来ないみたい。曰く、全員違う課題を

出されたらしい。教授もよくやるよね。人数分レポート読むのも重労働のはずなのに。

「ねえ、かまってよ」

そう言えば、この状況は変わるだろうか。変わるかな。……絶対変わる。もちろん、嫌な方向に。私だって、レポート中に邪魔されたら怒るからね。

恭平は、明日提出のレポート。いつ終わるのかさえわからない。いつもなら邪魔しちや悪いと思って帰るんだけど、今日は別。そばに居たかったの。

だから、こうして静かに終わるのを待っている。

カチン、と聞こえたのは、恭平のジップの蓋が開く音。

BLACK DEVEIL ブラックデビル 恭平愛用の、タバコの名前。タバコにしては甘ったるいにおいがする。

換気扇が回っているのは、タバコの煙にむせちゃう私がいるから。さりげない気遣いに少しだけ、嬉しくなつてにやけてる。ああ単純な私。

そういえば、私が好きになる男の人って、みんなそれぞれきれいな指をしている。

恭平だって、細くてきれいな長い指だ。タバコに絡む指に見惚れて、目で追つてみたりして。でもやっぱり、ここからじゃあ見えな

い。
ここから見えるのは、テーブル、パソコン、恭平の足。パソコンからあがつてるように見える、タバコの煙。レポートが終わるまでは、間違つても恭平の顔は見ちゃいけない。きつと彼の邪魔をしてしまうから。……かまってほしくなってしまうから。

いけないいけない。ちょっとだけ、きゅんときてしまったわ。他

のこと、考えよう。

恭平が言うには、タバコは一分ちよつとで一本終わってしまうらしい。私はタバコというものを毛嫌いしていて、一度も吸った（飲んだって言う？）ことがないから、その時間が長いのか短いのかはわからない。そもそもどうしてタバコを毛嫌いしはじめたんだっけ？ 小学生の頃だったかな……

そんなことを思いながら、ゆらゆらと、換気扇に飲まれてゆく煙を見つめていた。

いつの間にか眠っていたみたい。髪をすかれていた感覚が、気持ちよくてすり寄った。いつから頭を撫でてくれていたんだろう。恭平が少し、笑った。

「お前、ほんと猫みたいだな」

恭平は、ソファアーによりかかってあぐらをかいていた。少し低めのソファアーだから、彼の腰の高さほど。私が起き上がったら、ソファアーに座る私のほうが頭一個分高い位置にきた。この位置から恭平を見下ろすのって、なんだか新鮮だ。私はいつも、これくらいの位置から見下ろされているんだ。

「終わった？」

外はもう暗い。あれから2、3時間くらい経ったのか。

「おう。こんなもん、ヨユーだし」

恭平が言いながら体をこちら側に向ける。同時に、私は恭平の首に腕を絡め、髪に顔をうずめて目を閉じた。甘ったるいタバコのおいと、彼の香水のおいが混ざったにおい。私が好きな、恭平の

においだ。

恭平のにおいと、ぬくもりを感じて、人恋しかった私の心は一気に満たされる。どうしてこんなに温かくなるんだろう、不思議。

恭平が私の背中に手を回して、ぽんぽんとたたきながら、

「なんか、あつた？」

って聞いたけど、

「恭平のにおいって、落ち着く」

私は心からそういった。

的外れな答えではあるけれど、こうしていると癒されている気がして、ほかのことは、もうどうでも良くなってしまうんだ。

どれだけそうしてただろう。長かったような気もするし、短かかったような気もする。絡めていた腕を緩めると、恭平の輪郭が視界に入る。

「癒された？」

いつも私が言う言葉。今日は恭平に先取りされた。それがちょっとくやしくて。ちょっとだけ、頬を膨らませた。

「まだ足りない」

突然恭平が、ソファーにすわったままだった私を引きずりおろして、膝の間に抱きこんだ。引きずりおろされた私は、びっくりしてどきどきしてる。どきどきする理由はそれだけじゃあないんだけど。目を閉じて、肩に頭を預ける。

……暖かい。背中に回された腕も、頭を撫でてくれる手も。彼のおいに包まれて、今日初めて私は心の底から安心した気がしたんだ。

「どう？ 足りる？」

耳元で恭平がいう……わかってるくせに。

でも声がひどく優しく響いたから、今日はもっとよくばってしま

おう。

「ね、キスして」

視線が絡んだのはほんの一瞬。恭平のきれいな指が、私の顎をすくう。

あなたのすべてが私を癒す、薬なの。

（後書き）

感想等ございましたら、お気軽にお願いします。
踊り出すほど感激します。

今後とも、霧雨の小説を読んただけければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5495b/>

彼のにおいにつつまれて。

2010年12月10日18時01分発行